

## 胃袋の働き

お互い人間は年をとっても達者にお連れ通り頂きたいものですが、それには胃袋を壊さないようにすることです。昔からうまいものは腹八分と言いますが、人間は意地汚いもので、とかく過ぎてしまう。もう一杯という一步手前でやめることです。

信仰の上から言うと、胃袋は物を受け入れるところ、従って、どんなことも受け取り上手になることが達者にお連れ通り頂く道ではないかと思案するのです。

私 方の信者に、四十代から五十代にかけて胃潰瘍で苦しんだ人があります。教会へ来ては嫁のグチをこぼす。たとえば家族でビフテキを食べます。見ると自分たち 夫婦のビフテキが少ない、嫁が差別すると言う。ものさしで計ったわけではありません。多少の大小はあるかもしれないが、食べ過ぎ、胃を壊してはいかんと氣を遣ってしてくれると考えればなんでもないことです。受け取り方がヘタなのです。だから年中、胃が悪い。

その人も今日このごろでは、家族が明るく過ごし本当に素晴らしい嫁になったと喜んでいます。別に変ったのではない。こちらのものの見方・考え方が変わったから、見える世界が明るく見えてきたのです。相手を変えよう、治そうと思っているうちはダメです。夫婦の間で、「おまえなればこそ・・・」「あなたなればこそ・・・」と、言葉の語尾に「こそ」を付ける努力をして頂きたいのです。

「おまえがしっかり家を守ってくれればこそ、おれは安心してつとめることができる」  
「あなたが暑さ寒さも厭わず、汗水たらして働いて下さればこそ、私は安心して生活できます。」なんと美しい夫婦ではありませんか。

ところが新婚の頃はまだしも、年限を重ねると、どういうものか「こそ」が相手ではなく自分の方に付いてしまいます。

「おれが汗水たらして働いてやればこそ・・・」受け取り方が反対になると、とんでもないことになります。

長 雨が降り続く。Aさんは「毎日よく降るな。この雨の中、また会社に行かねばならん」とグチを言う。Bさんは「よく降ってくれる。今日も雨具屋さんが喜んで いるだろう」と明るく受け取る。同じ人間として同じ出発点から出発して五年十年も経つと、AさんBさんの間には相当な開きが生じます。片方はどんどん運命を伸ばし、片方は自分自身で運命を縮めています。

ものの見方、考え方、受け取り方というものは、誠に大切だと思います。

出典:『話の台』天理教道友社 Webストアより購入可